

経済・金融 フラッシュ

11月マネー統計

～貸出金利(一年以上)が過去最低を記録

経済研究部 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向：伸び率は09年6月以来の高水準

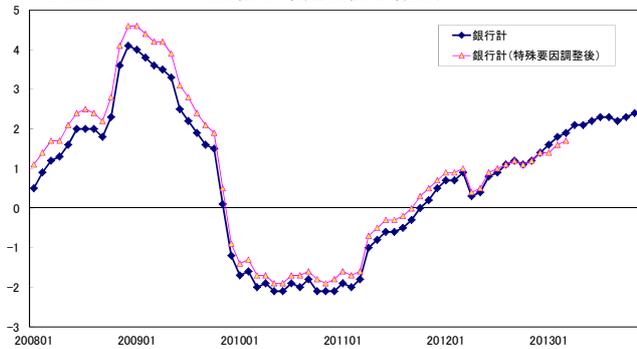
日銀が12月9日に発表した貸出・預金動向(速報)によると、11月の銀行貸出(平残)の伸び率は前年比2.4%(前月は2.3%)となった。伸び率の拡大は2ヵ月連続。

業態別の内訳では、地銀の伸び率が前年比3.0%(前月は2.8%)、都銀等が同1.8%(前月は1.7%)とそれぞれ拡大した。引き続き、電力会社向けや、不動産向けが牽引したが、その他でも幅広い業種で伸び率が拡大しているとのこと。

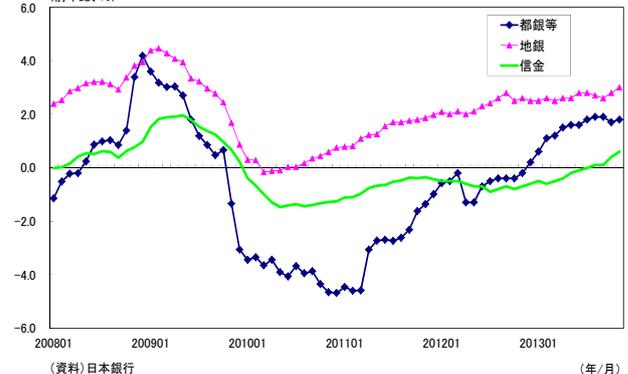
貸出先別(10月分まで)では、大・中堅企業や地方公共団体の伸び率が一服しているものの、中小企業がキャッチアップしており、貸出増加ペースの加速に寄与している(図表1～4)。

今年春以降、貸出の伸び率に頭打ち感が出ていたが、再び加速の動きを見せており、前向きに評価が出来る。

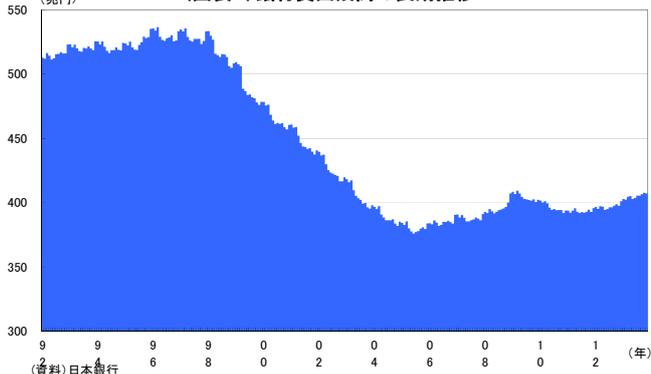
(前年比、%) (図表1) 貸出残高の増減率



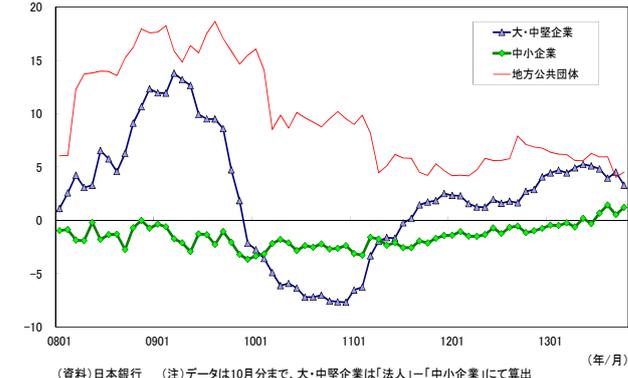
(前年比、%) (図表2) 業態別の貸出残高増減率



(兆円) (図表3) 銀行貸出残高の長期推移

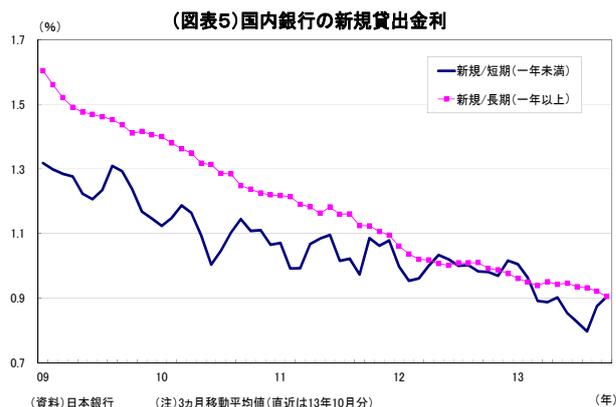


(前年比、%) (図表4) 貸出先別貸出金



一方、貸出金利は低下基調を継続している(図表5)。10月の新規貸出金利のうち、長期(一年以上)は1993年の統計開始以来はじめて0.9%割れを記録した。銀行間の競争が激しいうえ、日銀による大量国債買入れによって、長めの国債利回りが強力に押さえ込まれているためとみられる。

異次元緩和の効果とも言えるが、銀行の利ざやはさらに圧迫されている。銀行には超低金利下でかつのような国債売却益が見込めないという事情もあり、貸出増加圧力が今後高まる可能性がある。



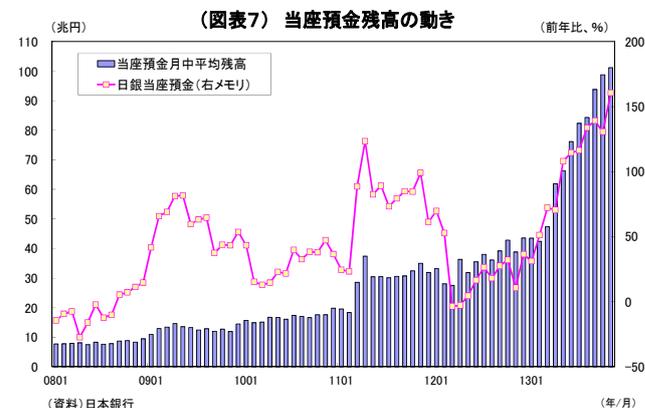
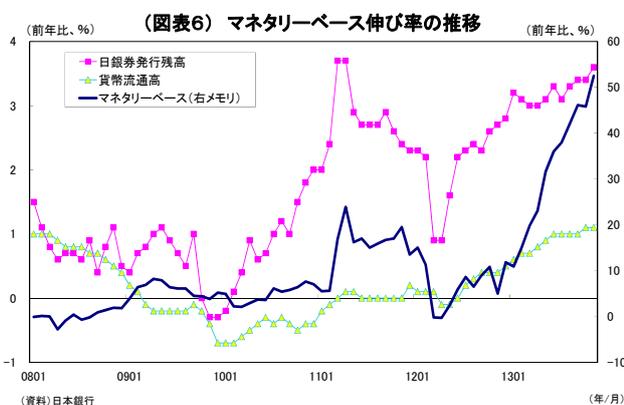
2. マネタリーベース：年末見通し 200兆円まであと少し

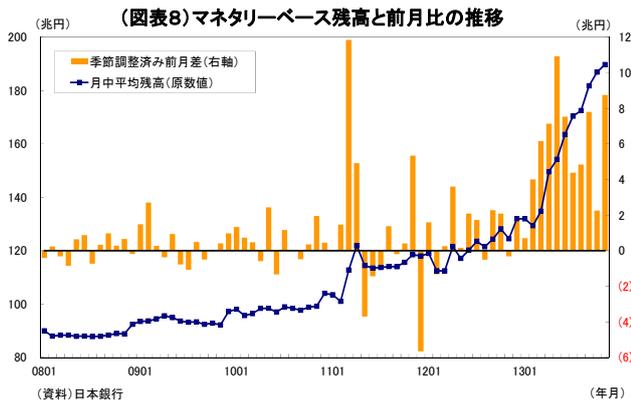
12月3日に発表された11月のマネタリーベースによると、日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示すマネタリーベース(平残)は189.7兆円と9ヵ月連続で過去最高を更新した。前年比伸び率は52.5%(前月は45.8%)と大きく拡大。従来同様、異次元緩和に基づく大量の国債買入れに伴い、日銀当座預金の伸び率が前年比160.5%(前月は130.5%)と拡大した影響が大。また、日銀券発行残高の伸びも前年比3.6%と徐々に拡大している。

なお、末残のマネタリーベースは191.6兆円となっている(図表6~7)。

日銀は、マネタリーベースを「年間約60~70兆円」ペースで増加させ、13年末に200兆円、14年末に270兆円とする見通しを掲げている。単純に月換算すると毎月約5.0~5.8兆円の増加ペースになる。11月のマネタリーベースの前月比増加額は、末残ベース(季節調整前)では1.8兆円に留まったものの、平残ベース(季節調整済み)では8.7兆円と、目標達成ペースをクリアした(図表8)。

マネタリーベースの13年末残高見通しは200兆円であるため、残り1ヵ月で8.4兆円の積み上げが必要となる。今月は資金吸収要因である国債等の発行超が11月よりも小さい見込みであり、見通しの大幅未達という事態は回避できそうだ。





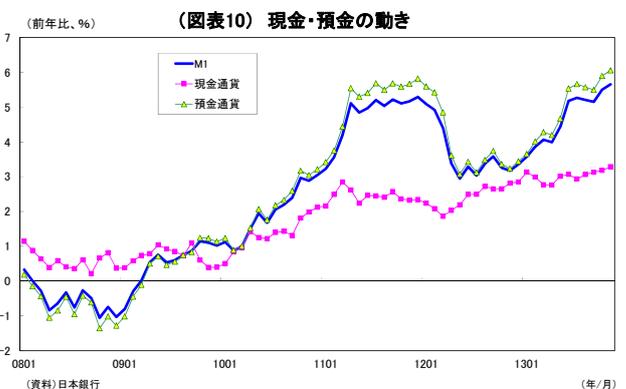
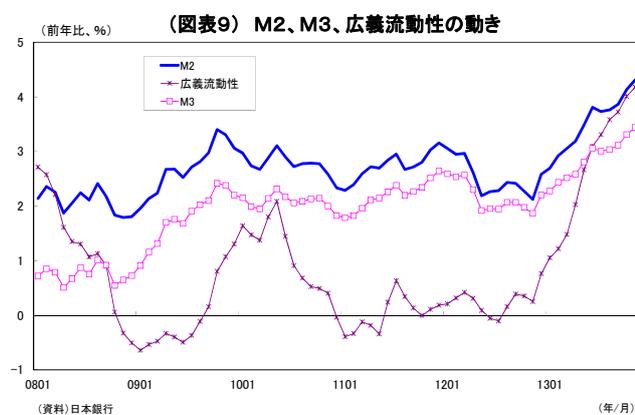
3. マネーストック： マネーの伸びは過去最大を更新

日銀が12月10日に発表した11月のマネーストック統計によると、市中通貨量の代表的指標であるM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高の伸び率は前年比4.3%（前月は4.1%）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同3.4%（前月は同3.3%）とそれぞれ拡大した。伸び率はそれぞれ現行統計で遡れる04年4月以降で最高を更新。現金通貨（前年比3.3%）、預金通貨（同6.1%）が引き続き過去最大の伸びとなったことが寄与している。

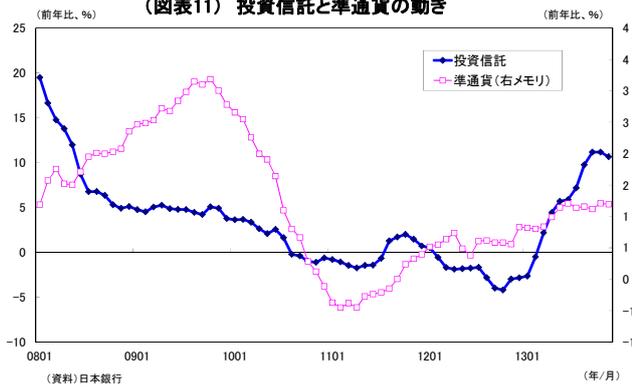
また、M3に投信や外債といったリスク性資産等を含めた広義流動性の伸び率も前年比4.2%（前月改定値は4.0%）と12ヵ月連続の拡大となった。こちらも04年4月以降で最大の伸びを更新。

内訳資産の伸び率を見ると、投資信託（元本ベース、前年比10.7%）、金銭の信託（同9.5%）、外債（同6.9%）などの高い伸びが全体を牽引しているが、国債（同▲22.2%）の減少ペース鈍化も効いている（図表9～11）。

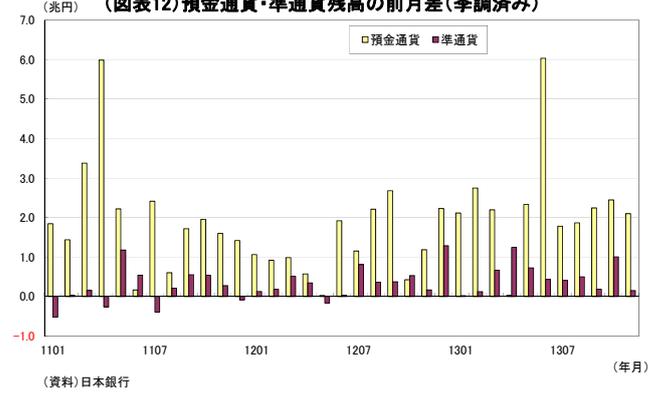
日銀の異次元緩和を発端として、市中のマネー量もじわりと増加している。内訳では、安全資産である預金への資金流入が継続し、その残高が過去最高を更新するなど、マネーの流れに大転換が起きているわけではないが、一部リスク性資産を積み増す動きも続いている。



(図表11) 投資信託と準通貨の動き



(図表12) 預金通貨・準通貨残高の前月差(季調済み)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。